

ハイデッガーの存在一般の意味への問いと

超越の問題系

丸山 文隆

導入

『存在と時間』(1927年)直後の幾つかのテキストにおいて、マルティン・ハイデッガーは「超越(Transzendenz)」の問題系に集中的に言及している¹。『存在と時間』から1929年の諸著作までのあいだに展開されたこの問題系は、『存在と時間』における彼の思想とどのような関係にあるのだろうか。

『存在と時間』の主目的は「存在一般の意味への問い(Frage nach dem Sinn von Sein überhaupt)」(SuZ, 183)だが、この問いは、〈われわれが存在をどのように了解しているのか〉を明らかにすることを目指すのであり、『存在と時間』の公刊された二篇はそれゆえ「われわれ […] がおのおのそれであるところの存在者」、すなわち「現存在(Dasein)」(SuZ, 7)の存在を分析する。『存在と時間』は1927年に「前半部」として出版されたが、現存在の存在了解の更なる徹底化をせずであった「後半部」はついに公表されることはなかった。とはいえ、少なくとも『存在と時間』公刊直後のハイデッガーの思惟はこの「後半部」に結果すべき、存在の問いの継続に集中していたに違いない。

一見してこの時期のハイデッガーにとって、「超越」問題をことさらに問う必要性は存在しないかに見える。というのも、〈いかにして主観はおのれを超越した客観と関わることができるのか〉という古典的な超越問題に対して、彼の「世界内存在」概念はすでに答えを与えているからである。現存在は或る世界のうちに存在するという存在機構をもっており、この世界において様々な存在者と出会うことができる。そして、この機構をもとにしてはじめて主観客観関係がそもそも成立するのである(SuZ, 366)。

だがハイデッガーは1927年夏学期講義「現象学の根本諸問題」(以下「現象学」講義と略記する)以降繰り返し、「世界内存在」を「超越」として問いなおすことになる。既に『存在と時間』第69節において瞥見されていた「超越」の概念はど

のような理由から、この著作の刊行以降注目を集めることになるのだろうか。この問いへの答えはいまだ欠けている²。

本稿のねらいは、超越の概念への注目の内的必然性を見つけ出すことに他ならない。この必然性はハイデッガーの、『存在と時間』の問いの継続の試みのうちに探されねばならない。第一節においてこの試みの概要が記述される。ハイデッガーの存在論は、学的企投をその方法とするような存在の学として計画されたのである。第二節はこの存在の学の暗黙の基本方針を、眼前のものの手許のものへの還元として解釈する。第三節において、しかしながら、眼前のものがこの基本方針によって見られていた以上に豊かな構造をもっているのだということが示される。ハイデッガーのこの構造への洞察こそが、世界内存在の概念のあらたな解明を動機づけるのである。そして、この新たな観点において、世界内存在は超越と呼ばれることになる³。

1. 存在の学としての存在論

『存在と時間』の問い、「存在一般の意味への問い」は、「現存在それ自身に属している或る一つの存在動向を、すなわち先存在論的 (vorontologisch) な存在了解を、徹底化すること (Radikalisierung) に他ならない」と説明されている (SuZ, 15)。この先存在論的了解は「たしかに、現存在において開示されている一切の存在者を包括している」が、「さまざまな存在様態に対応しつつ、それ自体を分節化することをいまだしてはいない」 (SuZ, 200-1)。このとき、この了解が他の存在者を包括していることは、われわれ現存在が「世界内存在」であり、非現存在的存在者のすべては、この「世界」のうちで近づきうるものとなるということによって説明されている (SuZ, 13)。それゆえ分析の手がかりは「現存在それ自身の存在構造」の解明である。この著作は、現存在の存在の意味が時間性 (Zeitlichkeit) であるということを解明し、この存在者の準備的分析を完成している。この時間性はすべての存在者の存在の統一的な意味として機能する存在時性 (Temporalität) としても妥当するはずのものとして目されている。

したがって、『存在と時間』においてハイデッガーの存在論が目指し、それへの準備を終えた課題とは、存在了解の分節化の解明である。ここで、「学 (Wissenschaft)」の概念が重要となる。『存在と時間』第 69 節において、学はその諸対象を主題化 (Thematisierung) する、といわれており、この主題化は「存在了解を変

様し (modifizieren) 分節化する (artikulieren)」ものであると語られている (SuZ, 364)。存在の問いとはわれわれの曖昧な「先存在論的存在了解」を分節化することに他ならないのであるから、上のような主題化のはたらきを本質的な要素としてもつ「学」の概念は、ハイデッガーの存在論の目的のために、何らか貢献するものでありうる⁴。

そして実際に、「現象学」講義の注目すべき幾つかの特徴のうち一つは、ハイデッガーが彼の哲学を「存在の学」と規定しているということなのである。存在の学は、〈日常的・非主題的な存在了解を、表明的・学的な企投によって反覆する〉という方法によって存在を問う⁵。ハイデッガーは、「主題化は客観化する (objektivieren)」と語る (SuZ, 363)。したがって、客観化は学の本質に属している (GA24, 458 を参照せよ)。そして常に、或る客観は主観との関連のうちでみられなくてはならないだろう。それゆえ、主観と客観との関係は存在の学としての哲学の問題となる。「現象学」講義の導入部においてハイデッガーは、自らの哲学を「存在一般の意味への根本的な問い」と、「この問いからあらわれてくる」四つの根本「諸問題」として紹介しているが (GA24, 21)、このとき彼は、〈主観と客観とをはじめとした様々な存在様式と、それらの統一的な意味とを説明すること〉という課題を、四つの根本諸問題のうち三番目、「存在の可能的諸変様と、それらの多様性の統一の問題」 (GA24, 24) として定式化しているのである。それゆえ、われわれはこの第三の根本問題を、〈主観客観関係を軸とした学的企投という方法において存在一般の意味への問いを継続することの可能性〉が検討される場所として解釈することができる。

さしあたりの結論として次のように言おう。主観客観関係の根源としての超越現象への、「現象学」講義におけるハイデッガーの注目は、存在の学としての存在論という概念によって理解しうる⁶。「現象学」講義におけるこの注目をわれわれはさらに精査しよう。だがそれに先立って、『存在と時間』第 69 節における超越の概念の役割について簡単に解釈しておくことが有益であると思われる。

2. 手許性から眼前性へ

『存在と時間』公刊直後、どのような基本方針に基づいて、先存在論的な存在了解の分節化は、とりわけ、非現存在的存在者の存在の了解の分節化は、解釈されようとしていたのだろうか。以下みていくように、われわれは、〈眼前性

(Vorhandenheit)の根源は手許性(Zuhandenheit)である」という基本方針が、『存在と時間』第69節の構成全体において暗示されている、と考えることができる⁷。

この節「世界内存在の時間性と世界の超越の問題」は三項から成る。すなわち、(a)「配視的な配慮の時間性」、(b)「配視的な配慮が内世界的な眼前のものの理論的暴露へと変様することの時間的意味」、(c)「世界の超越の時間的問題」である。そしてここでは、(b)項において分析される主題化のいとなみにおいて、われわれは眼前のものに関わりうるのだといわれている。主題化とは、眼前のものを単に見やるだけの理論的態度に他ならないが、これは配視的配慮からの或る転換に由来すると言われている。(a)項で分析される配視的配慮とは、実践的に手許のものに関わることである。そして、ハイデッガーは(c)項において現存在の超越を簡単に論ずるに先立って、次のように議論全体の構造を注記しているのである：

眼前のものの主題化が、すなわち自然の学的な企投が可能になるためには、現存在は、主題化される存在者を超越するのでなければならない。超越が客観化(Objektivierung)のうち^に存するのではなく、客観化が超越を前提するのである。しかし内世界的な眼前のものの主題化が配視的に暴露する配慮の或る転換であるのならば、このとき、手許のもののもとに「実践的に(praktisch)」あることの根底にすでに、現存在の或る超越が存しているのでなくてはならない。(SuZ, 363-4)

この記述において、〈或る眼前のものと現存在の関わり^の根底に、或る手許のものとの関わりが存しているということ〉、したがってまた、〈眼前のものとの関わりが「超越」なる現象に根拠づけられているとすれば、すでに手許のものとの関わりが「超越」に根拠づけられているということを示す必要がある〉ということが、述べられている。すると、このことからして、すべての眼前のものとの関わりは、手許のものとの関わり^の派生態として解釈しうることになる。ここにおいて、超越の概念の役割は、〈手許のもののもとに「実践的に」あること〉を基礎づけることなのであり、そして「理論的」態度が実践的関心に基礎づけられるがゆえに、眼前のものとの関わりは直接的に超越の現象に基礎づけられることを要しないのである⁸。

すべての眼前のものが、手許のものとの交渉において出えられるものの派生物

にすぎないのだとすれば、眼前存在の本質は手許性のうちに求められると考えるのが自然であろう。この〈眼前性の根源は手許性である〉という基本方針が受け入れられているのだとすれば、このとき眼前のものの存在は手許性からして解釈されるべきであることになる。これは、すべての非現存在的存在者は、内世界的な手許のものとして、その内世界性（Innerweltlichkeit）とともに探究される、ということを手許性の方針である。この方針に基づけば、眼前のものは内世界性がそれに本質的に属するような存在をめぐって企投されることになる。しかし、この学的企投は本当に、非現存在的存在者の存在の探究のための適切な方法なのだろうか。次節でみるように、このことこそが、「現象学」講義の主観客観関係の研究においてまさに吟味されていたことなのである。

3. 超越の概念

ハイデッガーが主観客観関係の根源としての超越をどのように論じていたのかを検討しよう。本節において、はじめに、「現象学」講義第二部第一章における超越の概念の簡単な規定を確認する（第一項）。ついで、第三の根本問題の歴史的導入を扱う同講義第一部第三章に注目し、主観客観関係の問題系に関するハイデッガーの取り組みの基本姿勢を概観する（第二項）。この基本姿勢の紹介において、ハイデッガーは概して『存在と時間』の世界内存在の教説を繰り返しているだけにみえる。だが、仔細に検討すれば、ここでは「より広い意味における眼前のもの」といった、『存在と時間』にはみられなかった新たな概念群が導入されていることがわかる。この新たな概念群に注目することではじめて、われわれは超越の概念への注目が、世界内存在の概念があらたに捉え返されていることの指標であるということを示すことができる（第三項）。

3. 1 超越の概念の暫定的提示

ハイデッガーは、「現象学」講義第二部で、「十分ではない」ものであるが、とことわりつつ、超越概念を提示している（GA24, 423-4: 以下、本書からの引用に限り、頁数のみ表記する）。伝統的主観性哲学によれば、「超越」するものはもろもろの「物（Ding）」であるが、ハイデッガーはそのような諸物が現存在に出会われるために、「帰趨連関、有意義性、世界」が「先行的に了解」されていなければならないと強調する（424）。世界は、「或る意味ですべての諸客観よりもさらに外

にある」ような「本来的に超越的なもの」であり、そして「世界内存在の、すなわち現存在の、根本規定」である (424-5)。世界が超越的なものであると同時にまた、「本来的に超越的なものは現存在である」(425)。「現存在はそれ自体、その存在において越え出つつ (überschreitend) 存在している」(425)。「その存在機構に超越が属している存在者のみが、ひとつの自己といったものである、という可能性をもつ」(425)。

説明されている事柄は、『存在と時間』における世界内存在ないし「開示性」の教説を越え出るものではないだろう⁹。すなわち、現存在は内世界的存在者の了解に先行して、「帰趨連関、有意義性、世界」を了解しており、この世界は現存在の存在の規定に属するのだから、世界了解は自己了解に包摂される。自己了解は自己の存在を気遣うことの或る様式として、現存在に特有の現象である。「それにとって […] おのれの存在が問題であるような存在者」(SuZ, 12)、すなわち現存在だけが、本来的な意味でなにかと「関わる (sich verhalten)」ということができる。

現存在の超越、〈越え出て (Über-hinaus)〉ということは、現存在が、眼前のものへとであれ、他者へとであれ、自己自身へとであれ、存在者としての存在者へとおのれを関わらせる、ということをも可能にする。[…] それゆえ、存在を先行的に了解することは超越に基づいている。(426)

(1) 存在を了解しており、それによって (2) おのれの存在を気遣うことができ、それゆえ (3) 世界を了解し、かくして (4) 内世界的存在者や他の現存在、そして自分自身とも関わるのできる存在者、すなわち現存在の、以上のような特有のありさまが全体として「超越」と呼ばれているのである¹⁰。これが、「現存在の根本機構、世界内存在、或いは超越」、ないし「根源的超越」の概要である (427)。

3. 2 主観と客観との存在はどのように問われるべきか

「現象学」講義において、彼は主観と客観との存在を問う必要を第三の根本問題として提示し、第二部第三章においてこれを扱うと予告している。だがこの講義は第二部第一章までで終了しており、われわれに残されているのは第三の根本問題の歴史的導入である第一部第三章のみである。以下この章に注目することで、超越の概念の位置を明確にしよう。

彼によれば、われわれは主観と客観との存在を問う際、これらが〈お互いに相手を「必要とする」もの〉であるということをはじめから前提して議論してはならないのだという。

[…] 主観客観関係から始めることは、主観の存在様式についての本来的に存在論的な問いへの通路をふさぐばかりでなく、〈可能的な仕方客観となるけれども、必然的に客観とならねばならないわけではないような存在者〉の存在様式についての、本来的に存在論的な問いへの通路をもふさいでいるのである。(223)

反対にわれわれは、なぜ、そしてどのようにして、主観は客観を必要とし、客観は主観を必要とするのか、と問わなければならないのである。

或る客観が主観を必要とすることの探究において、「或る存在者はそれ自体からしてひとつの客観となるのではない」ということを考慮することが肝要である。それに対し、存在者は主観なしに存在しうる。

[…] 眼前のものはそれ自体からして客観となり、そのあとで或る主観を要求するのではなくて、或る主観による客観化のうちのみ客観となるのである。存在者は主観なしに存在するのだが、諸対象は、対象化する主観にとってのみ、与えられる。(223)

ハイデッガーは「非現存在的存在者の存在はより豊かでより複雑な構造をもっており、それゆえ眼前のもの物連関としての通常性格づけを超えている」と語る(249)。ハイデッガーの注意をひいている(通常物連関性格づけ¹¹においてみられる限りでよりも)「より豊かでより複雑な構造」をもった「非現存在的存在者の存在」とは、「可能的な仕方客観となるけれども、必然的にそうならねばならないわけではないような存在者」の存在なのである(223)。この観点においてわれわれは、非現存在的存在者(とりわけ、眼前のもの)の豊かな構造の根幹が、それらが現存在に依存せず存在すること、存在者の現存在への非依存性であると考えられる¹²。

或る主観が客観を必要とすることの探究はそれに対し、現存在はおのれを常に既に他の存在者のもとで見出す、という事情から出発しなければならない。「現存

在の本質には、〈常に既に他の存在者のもとに存在している〉という仕方で実存することが属している」(224)。現存在は本質上、他の存在者と関係するものである。そして、「…に關係する (das Sichbeziehen-auf)」、というこの本質規定をハイデッガーは「志向性 (Intentionalität)」と言い換える。「現存在の実存には志向性が属している」(224)。しかし、ハイデッガーは従来の志向性の把握は不十分であり、「志向性は、現存在の超越に基づいている」(230)という観点において、あらたに捉えられねばならないと主張するのである。

前項で確認したように、超越とは差し当たり「世界内存在」と「自己了解」の教説を指している。「われわれが言っているのは、眼前の存在者が経験されることに先立って、すでに世界が了解されているということである」(236)。そして、世界は現存在の存在の規定であるから、「世界は現存在する」(237)。しかしこのように考えると、「世界は或る主観的なものである」という「観念論 (Idealismus)」におちいってしまうかのように見える¹³。だが、そのことのゆえにあわてて引き返すまえに、どのような意味で世界は「主観的」といえるのかを検討する必要がある。この検討において、ハイデッガーは興味深い「先・投」なる現象に言及している。われわれは項をあらためて、この記述を正しく受け取ろう。

本項において、ハイデッガーが主観客観関係への問いにおいて注意すべきであると考えていた洞察が明らかになった。それは、存在者の現存在への非依存性である。この事態の洞察は、前節でみた「学的企投」の方針に代表されるような、ハイデッガーの幾らか「観念論」的な基本姿勢に対する、ささやかな留保ないし見直しの契機であると考えられる。

3. 3 根源的企投

〈存在者の現存在への非依存性〉への洞察は、ハイデッガーの非現存在的存在者の存在への問いに対して、見直しを要求しているとみることができる。たしかに世界は或る意味で主観に属するものであり、この世界のうちでのみ存在者は主観に出会われるような客観となる。だがその際、これら存在者が現存在やその客観化に依存せずに存在している存在者であるということが、十分に考慮に入れられなくてはならないのである。

ハイデッガーの「観念論」的な姿勢に対する再考を検討するために、次の引用を詳しく見てみよう。たしかに世界は或る意味で現存在が「外へと投射」してしまっているような何ものかである。だが、〈存在者の現存在への非依存性〉を適切

に記述するため、ハイデッガーは〈常に既に現存在は世界内存在してしまっている〉という観点から考察をはじめるとはなく、〈世界をまさに「投射」する〉という場面に注目する観点をとることになるのである。

世界とは、主観がいわばおのれの内面から「外へと投射する (hinausprojizieren)」ような或るものである。[...] 現存在が実存するかぎり、現存在に、その存在とともに、或る世界が、前・投 (vor-werfen) されている。実存する、とは他でもなく、次のことをいう。すなわち、おのれに世界を先・投 (vorher-werfen) すること、しかもそれは、この前投の被投性とともに、すなわち或る現存在の事実的実存とともに、その都度既に眼前にあるもの (schon Vorhandenes) もまた暴露される、というしかたで先・投することなのである。[...] 事実的な世界内存在には常に、内世界的存在者のもとで存在することが属している。より広い意味における眼前のもののもとでの存在は、つまりたとえば、より狭い或いはより広い環境における諸物と配視的に交渉することは、世界内存在に基づいている。(239)

引用箇所の後半において、眼前のものが『存在と時間』とは異なった観点においてみられている。「より広い意味における眼前のもの」という表現は明白に、『存在と時間』で用いられていた意味における手許のものをも含むより広い意味における、ということの意味している。『存在と時間』において「眼前のもの」という概念はこのようには決して用いられなかった。同書第 69 節において非現存在的存在者は、〈常に既に内世界的な手許のものとして出会われてしまっており、そのあとで場合によっては学的な企投によって眼前の客観になるもの〉としてみられていた。これと対照的に、「現象学」講義においては、非現存在的存在者は「より広い意味における眼前のもの」として、すなわち、或る主観のようなものに依存して存在するわけでも、内世界的な手許のものとして暴露されることに依存して存在するわけでもないものとして、みられているのである。ハイデッガーは「現存在の事実的実存とともに、その都度既に眼前にあるものもまた暴露される」と語っている。この「既に」は、この種の眼前のものにとっては、それがそれであるところのものとして存在することが、暴露されることに依存しない仕方であるかであった (かのようにわれわれはそれを見出す)、ということの意味している。すなわち、眼前のものはそのようなものとして、それが暴露されることに先立つ

既に存在していたものとして見出されるのである。非現存在的存在者が、現存在に依存せずに存在しているようなものとしてみられているということは明らかである¹⁴。〈眼前性の根源は手許性である〉という、われわれが『存在と時間』第69節において暗示されているものとしてみた基本方針はここにおいて放棄されている。眼前のものは、手許のものの先学問的理解をいわば上からなぞるような学的企投によって見出されるものとしてではなく、現存在がそれによって世界を成立せしめるような根源的先・投によってはじめて見出されるものとして、みられている。

このような根源的企投、世界企投 (Weltentwurf; GA26, 247) は、1928年夏学期講義において超越として詳述されることになる¹⁵。以上の考察からして、われわれは「現象学」講義におけるハイデッガーの超越現象への注目の核心が、非現存在的存在者の現存在への非依存性への洞察にあると結論することができる。暗示されていた、〈先学問的理解をなぞる学的企投〉という、眼前のものへの接近のための基本方針は、ここで再考されている。そしてこの再考は〈存在者の現存在への非依存性〉への洞察によって動機づけられている。そしてこの洞察は、学的なものとは異なった種類の企投を探究することを導いている。この企投とは根源的企投、すなわち超越なのである。

結論

われわれの考察をまとめよう。

1. ハイデッガーの『存在と時間』の問いとその継続は〈すべての存在者の様々な存在の了解を分節化しつつ把握しなおすこと〉という営みに他ならなかった。これは〈先学問的な了解を学的把握によって反覆する〉という学的方法において遂行されるのが自然であると思われ、この方法は本質的に主観客観関係と結びついていた。

2. 上記方法とともに、明言されていない基本方針として、〈すべての非現存在的存在者 (眼前のもの、手許のもの) の存在は内世界的な手許のものとの交渉およびその派生状態において見出されるものである〉という見通しが存立していたと考えられる。

3. だがハイデッガーは、「現象学」講義において、〈非現存在的存在者 (とりわけ、眼前のもの) が、現存在に依存せずに存在している〉という事象を洞察し

ており、この事象が客観の存在の分析において説明されるべきであると考えていた。

4. (2)の基本方針が(1)の方法と結びついたとき、〈内世界的なものとして既に発見されており、既に客観として主観の前に立てられてしまった眼前のもの〉として眼前のもの一般が規定されることは必然である。このとき(3)の洞察を適切に記述することが求められるために、ハイデッガーは学的企投とは別種の企投を方法として求めたと解釈することができるのである。

5. この企投は、それによって世界内存在がはじめて成立する「先・投」である。

6. 主観客観関係の根源として見られた限りでの世界内存在を、ハイデッガーは特に「超越」と呼んでいるとみることができるが、これは、〈常に既に世界内存在してしまっていること〉すなわち〈常に既に超越してしまっていること〉という(静的な)観点から考察を始めるのではなく、〈現存在が世界内存在することをはじめる〉場面¹⁶、いわば、はじめて〈現存在が超越する〉場面に定位する(動的な)考察を、ハイデッガーが準備していたことの標識と考えることができる。

かくしてわれわれは、冒頭の問いに答えよう。〈超越の概念への注目の内的必然性とは何か〉という問いに対し、〈存在一般の意味への問いの方法として注目された学的方法は主観客観関係と本質的に結びついていたのであり、この方法の吟味のために、主観客観関係の根源としての超越が注目されたのである〉と答えられる。さらに、〈主観客観関係の根源として、超越はどのように注目されたのか〉という問いに対しては、〈非現存在的存在者が現存在に依存せずに存在している、という洞察が隠蔽されない仕方、主観客観関係を説明することを目指しつつ、「世界内存在」の静態的分析に比して、より発生的な「超越」の分析が準備されることになった〉と答えることができる。ここで準備された超越の分析が「現象学」講義以降どのように展開されたのかということは、本論文の問いの範囲を超えている。

¹ 代表的なものを挙げれば、いずれも1929年に発表された、「形而上学とは何であるか」、「根拠の本質について」、『カントと形而上学の問題』がこれにあたる。

² この分野において目下もっとも包括的かつ先鋭な研究は稲田(2006)であろう。稲田は『存在と時間』、「現象学」講義において部分的にのみ語られている存在時性の問題系を予想しつつ描き出すにあたって、1928年夏学期講義、さらには『カントと形而上学の問題』の叙述等をも参照しつつ「超越、存在了解、存在それ自身が有限であるとは、いったいどういうことか?」(稲田2006, 145)という問いへと収斂していくべき問題系としてこれをまとめている。しかし、わ

れわれの見通しによれば超越の問題系、さらには有限性の問題系は、『存在と時間』公刊後、ハイデッガーにとって次第に注目が高まっていく問題系である。われわれはこの注目の高まりがどのような動機による、どのような諸段階におけるものであるかを知りたく思うが、それゆえ稲田の研究はただちにわれわれの問いに答えるものではないのである。

³ ハイデッガーは、『存在と時間』第69節、「現象学」講義、続く1927/28年冬学期講義と、超越の概念の究明の必要性を繰り返し唱え、ついに1928年夏学期講義において集中的に論究するに至る。したがって超越の概念それ自体の射程を明らかにするためには1928年以降のテキストの読解が欠かせないが、本稿の関心はむしろ、この概念の「存在一般の意味への問い」との関係にある。したがって本稿は、この問いに対する姿勢が幾らか不明瞭になっていく1928年以降のテキストを読解することを禁欲し、1927年のテキスト、特に「現象学」講義において、「存在一般の意味への問い」と超越の問題系との関係を究明することを目指す。

⁴ このつながりに関し、稲田(2006, 113-5)ならびに丸山(2012, 161-5)を参照せよ。

⁵ GA24, 399および丸山(2012, 161-5)を参照せよ。

⁶ 稲田は、学が主観客観関係を軸とするということに注目しておらず、それゆえこのことを介した学と超越との内的連関には触れていない。そして、存在了解と超越とがほぼ同じ事象を指していると指摘しつつ、「学としての存在論を見やっつて」、表明的・主題的である限りの存在了解が特に超越と呼ばれているのだ、と主張している(稲田2006, 117)が、この主張は疑わしい。なんととなれば、稲田も同趣旨の文章を引いているが、「超越は現存在が[...]存在者へとおのれを関わせることを可能にする」(GA24, 426)。表明的存在了解(稲田が超越と呼ぶもの)が、日常的なものをも含めた存在者との関わりを基礎づけている、という主張は不合理である。(存在を表明的・主題的に了解していない限り、現存在の日常的な存在者との関わりは不可能である、ということになる。)

⁷ 丸山(2012)において私は、別の根拠から同じ方針を読み取ることを試み、これを「現存在と手許のものとの二元論」と呼んだ。丸山(2012)の第四節を参照せよ。

⁸ そして実際、そのように叙述は進められている。すなわち『存在と時間』においては(眼前のものとの関わりが超越に基づいていること)の直接的な(存在時性的)証示は行われていないのである。もしこのような証示が直接的には必要ないと考えられているのであれば、(すべての眼前のものとの関わりが実践的関心に基づいている)という前提があるために、(眼前のものとの関わりが超越に基づいている)ということを示すためには(実践的関心が超越に基づいていること)の証示だけで十分である、と想定されていると考えるのが自然であろう。(眼前のものとの関わりが実践的関心から派生することがある)ということは『存在と時間』で述べられていたが、すべての眼前のものとの関わりの根源がそれであると断言されていないように思われる。だが上のように考えれば、このような想定が存立していると解せるのである。)

⁹ 稲田もほぼ同意見であろう。「超越は世界一内一存在としての現存在の根本構造と同義であり、それ以外のことではない」(稲田2006, 101)。ただし、前註(6)を参照せよ。

¹⁰ この統一的な現象をあえて一言で呼んだならば、或いは次のようになろう。「超越とは、おのれを或るひとつの世界から了解するというをいう」(425)。榊原哲也はわれわれの注目するテキストだけでなく、1928年夏学期講義、「根拠の本質について」等をも参照しつつ、「超越」を「現存在の超越の運動」として、以下のようにまとめている。すなわち、「(先行的に存在者を乗り越え世界企投を行いつつ、存在者の真ただ中で存在者によって徹底的に気分づけられながら、存在了解を实らせ、それに基づいて、世界内のさまざまな存在者に対して志向的に振る舞い・態度をとる)という在り方」と(榊原1994, 160-1)。われわれが瞥見した「現象学」講義におけるこの概念も、榊原のまとめた統一的な運動と別のものではないだろう。

¹¹ ハイデッガーは「現象学」講義第一部第三章において、『存在と時間』における有意義性の分析を簡単に繰り返し、これをもって内世界的存在者の存在と世界との関係の特徴づけている。そして、このような道具連関の分析を「物連関の特徴づけ」と呼んだ上で、この章の末尾において、この分析以上のさらなる複雑な構造の分析が必要であると述べているのである。

¹² 『存在と時間』第43節において、「存在者ではなく、存在の、存在了解への依存性 (Abhängigkeit)」が説明されているが、ここで同時に示されているであろう〈存在者の、存在了解への非依存性〉は、われわれの注目する「存在者の現存在への非依存性」と同じものを指していると考えられる。ここでは次のように述べられている。「そのとき〔現存在が実存しないとき〕には、存在者が存在するとも存在しないとも言われえない。だがいまは、存在了解が存在し、それとともに眼前性の存在了解も存在する限りは、そのときであっても存在者はさらにそのまま存在するであろう、と言われうるのである」(SuZ, 212)。われわれが注目する「存在者の現存在への非依存性」は、基本的にこの引用にみられるような、実際に現存在が存在する「いま」において、〈現存在が存在しない場合でも、存在者は変わらず存在していたであろう〉というわれわれの了解が成立している、という事態を名指す概念として理解できる。

というのも、〈存在者の、存在了解への非依存性〉とともに示されていたのは「存在の、存在了解への依存性」に他ならなかった。〈存在は現存在に依存する〉のであってみれば、〈眼前のものが存在する〉ということもまた、現存在に依存するような「存在」に違いないのである。しかしながら、このような「依存」が成立している上で、それでも次のような「非依存性」性格が、存在者の存在には認められねばならないのである。「存在者は、そのものがそれによって開示され、発見され、規定されるところの経験や知見や把握には、非依存的に存在する。しかし、存在は、存在了解といったものがその存在に属しているような存在者の了解においてのみ、『存在する』」(SuZ, 183)。

¹³ 実際、ハイデッガーは観念論に相対的に高い評価を与えている。次を参照せよ。「實在論に対比して、観念論は、それが結論においてどれほど対立しておりさらにまたどれほど維持されえないとしてもそれがそれ自身を『心理学的』観念論として誤解しない場合には、根本から決定的な優位をもっている。観念論が、存在と実在性とはただ『意識のうち』のみあると強調するとき、ここには、存在は存在者によっては説明されえない、ということの了解が表現にもたらされている」(SuZ, 207)。

¹⁴ いわば、現存在は眼前のもの(存在根拠)ではない。(無論、認識根拠)であるが。)したがってわれわれ人間の認識は、それによって対象が存在するに至るような神的認識ではなく、「前もって既に眼前に存在する」ものを認識する有限的認識である (GA3, 25)。このような現存在の有限性に依拠しつつ超越を分析することは、『カントと形而上学の問題』におけるハイデッガーの最大の関心事のうち一つである (GA3, 42-3)。

¹⁵ 別稿において詳述する予定のことであるが、1928年夏学期講義における「メタ存在論 (Met-ontologie)」概念は、「現存在の事実的実存」が「自然の眼前存在」を前提する」という新たな前提帰結関係 (GA26, 199) を提起し、ここで学的企投の順序(日常的了解から学的把握へ)に依拠するのではない、被投性に基づく分析が登場していると考えられる。「現象学」講義における超越の分析は上記分析の元型であると解釈することができようが、しかしながらこの講義における〈存在者の現存在への非依存性〉はいまだ学的企投の順序と両立不可能な洞察ではない。問題となっているのは、われわれの日常的了解のうちにある眼前のもの(存在)の探究であり、この際、〈眼前のもの(存在)にとって、現存在に発見されているということが必然的であるわけではない、ということがわれわれに了解されている〉という事象が記述されているのだ、と理解することは十分可能であるからである。前註(12)を参照せよ。

¹⁶ Görland (1981, 8) を見よ。

[参考文献]

文献の参照は、第一次文献については略号を用い、第二次文献については著者名と年号を用いて示す。

第一次文献

Martin Heidegger Gesamtausgabe (GA) bei Vittorio Klostermann.

— GA3: Kant und das Problem der Metaphysik, 1991.

— GA24: Die Grundprobleme der Phänomenologie, ²1989.

— GA26: Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz, ²1990.

SuZ: *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, ¹⁸2001.

第二次文献

Görland, Ingtraud. 1981. *Transzendenz und Selbst*, Vittorio Klostermann.

稲田知己. 2006. 『存在の問いと有限性 —ハイデッガー哲学のトポロギー的究明—』, 晃洋書房.

榊原哲也. 1994. 「フッサール —超越の問題をめぐって—」, 『ハイデッガーを学ぶ人のために』, 大橋良介編, 世界思想社, 所収, 146-66.

丸山文隆. 2012. 「ハイデッガーの存在一般の意味への問いと『存在論的な学』」, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室, 『論集』 30 号, 160-73.